

# 企画展「大政奉還を「象」つた男 後藤象二郎」

■会 期 平成二十九年（二〇一七）七月十五日（土）～九月十八日（月・祝）

■主 催 高知県立歴史民俗資料館（公益財団法人 高知県文化財団）

■後 援 高知県教育委員会、高知新聞社、NHK高知放送局、RKC高知放送、  
KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知

■平成二十九年年度一般財団法人高知県教職員互助会助成事業

## いあごり

平成二十九年（二〇一七）は、大政奉還がなされた慶応三年（一八六七）から一五〇年、さらに、来年は、明治維新から一五〇年を迎えることから、高知県内では二年間にわたり「志国高知 幕末維新博」が開催されます。当館は、この博覧会の地域会場になるため、期間中、幕末維新に焦点を当てた展覧会を順次開催することとしています。その第三弾となる本展では、大政奉還の実現に奔走した土佐藩士・後藤象二郎を取り上げます。

意外にも、今まで象二郎を真正面から取り上げた展覧会は行われておりません。本展では、昇進のプレッシャーを友に吐露した書状など彼の直筆の手紙をはじめ、板垣退助・吉田東洋・山内容堂・坂本龍馬ら、彼に影響を与えた人びとの資料を一堂に集め、これまであまり注目されてこなかった象二郎の内面と半生を皆様に紹介いたします。さらに、大政奉還建白書など、象二郎が「象」った大政奉還にまつわる一級資料も公開します。

実は、本年は象二郎の没後一二〇年にもあたります。この記念すべき年に、本展を通じて、象二郎の人となりや功績への理解を深めていただければ幸いに存じます。

本展開催に際しましては、貫汪館の森本邦生館長に、関連企画として催す剣術公演会（八月六日開催）の講師を務めていただくとともに、本誌のために玉稿を賜りました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、これまで当館へ貴重な資料をご寄贈・ご寄託くださいました皆様、また、本展開催に、貴重な資料をご出品賜りました関係各位に、心から感謝を申し上げます。

平成二十九年七月十五日

高知県立歴史民俗資料館

館長 武政 龍司

惶誠恐謹言

天下憂世之上

謀シテ敢テ言

候ハ誠ニ可

候

朝廷幕府

係旨意相

凡ニ似タリ誠

之事ニ候

ハ我之大志

ノ大幸ナリ

於是乎成矣

候如此事也

目次

ごあいさつ	3
目次	4
凡例	6
プロローグ 後藤象二郎 死す―「いのす」と「やす」―	7
I 吉田東洋と象二郎	11
一 後藤家と象二郎	12
二 東洋の薫陶	15
三 東洋暗殺	21
コラム おこぜ組と新おこぜ組	28
II 山内容堂と象二郎	29
一 容堂と土佐勤王党	30
二 大監察後藤象二郎	34
三 開成館設立	43
コラム ある住職が見た幕末の土佐	48
III 坂本龍馬と象二郎	49
一 象二郎、長崎へ	50
二 象二郎、船を買う	52

大内不図

再發は不得

此仕ル以來

執作トイテ不

事ニ成到リ

儀暫時

申候ハ誠

之次第ニテ

事ノ日直

思仕罷在ハ

存之報一二

以テ言上

幾重ニモ

大之道理

萬民

難ストモ

唯願

大英衝

萬民ト共

明正大

萬世

國ニ臨

六根抵

此

二京之

言仕ル

候一

四之筋

図

不

シ 喋々  
三 既往は是非也

三 龍馬との出会い	55
コラム 『池道之助日記』にみる長崎	60
IV 大政奉還、成る。	61
一 大政奉還前夜	62
二 大政奉還、成る。	66
コラム 英国女王からの御礼	72
エピローグ その後の象二郎	73
特論 森本邦生「大石神影流剣術と土佐藩」	76
資料翻刻	82
象二郎相関図	87
象二郎年表	88
資料目録	90
参考文献	92
謝辞 協力者一覧	93

## 表紙写真

後藤象二郎湿板写真（館蔵）

後藤象二郎書状 真辺栄三郎宛（館蔵）

大政奉還建白書副書（足立隆文氏蔵）

## 裏表紙写真

後藤象二郎書状 真辺栄三郎宛（館蔵）

大政奉還建白書副書（足立隆文氏蔵）

## 凡例

- ・本書は、高知県立歴史民俗資料館において、平成二十九年七月十五日（土）～平成二十九年九月十八日（月・祝）に開催する企画展「大政奉還を「象」った男 後藤象二郎」の展示解説図録である。
- ・資料番号は展示全体の流れを考慮して付したが、実際の展示順とは異なる場合がある。また、会期中、資料保護のため展示資料を一部変更することがある。
- ・パネル展示資料などについては、図録の写真資料名称に参考と記して区別した。また複製資料は（複製）と明記した。
- ・途中で名前が変わるなど、一般的な呼称が複数ある人物については後藤象二郎・西郷隆盛など一つの名前に統一した。
- ・旧字・異体字は基本的に新字としたが、史料引用や翻刻文はこのかぎりではない。
- ・主な資料については、翻刻文を付した。なお、改行には／を、判読不能の文字は■としている。また、一部資料は句点を補った。
- ・本書の編集・執筆は、当館学芸員石畑匡基が担当した。「特論」は、貫汪館館長森本邦生氏より玉稿を賜った。